

きたないものとはどんなもの

ぼくは、精神科の医者でもあるが、ぼくのところに、こんな相談をしにくる人がある。手を何度洗っても、まだよごれているような気がして、心配だというのだ。

これは不潔恐怖症という名まえがつけられていて、神経症という病気のなかにいれている。たしかに、こうした人たちを見ると、君たちも、おかしいと思うだろう。そのような人は、また世の中のものがきたなくて、さわることができないという。たとえば、電車に乗ると、つり皮があるが、どこのだれがつかまったものかもわからないと思うと、不潔でつかまる気になれない。学校の机なども、おなじ理由からきたないと思う。そして、きたないけれども、どうしてもさわらなければならぬときや、うつかりさわってしまうときがある。するとたいへんだ。何度も手を洗って、自分の手についてたよごれを落とそうと思う。しかし、いくら洗っても、そのよごれが完全に落ちないような気がする。

自分でも、それが少々ばかげたことだとは思う。ほかの人たちはへいきでさわっているのだし、そんなに何度も手を洗いはしない。それでも、とくべつ病気になったりはしない。それで、こんなばかげたことを心配する自分は、おかしいと思う。つまらない神経を使っていると思う。でも、いざとなると、そのよごれのことを気になってしまう。

君たちが、ばからしいと思うのも当然だ。だって、その御本人ですら、自分の心配がばかばかしく、理にあわないと思っっているのだから。しかし、その人にいくら、心配しても意味がないよ、心配するなよといつても、神経症は、なおらない。

ところで、君たちは、そんな人たちと自分とは、まったくちがつていると思うだろうか。自分とは縁がないと思うだろうか。じつをいうと、そうではない。

たとえば、ぼくが、ある人のおしっこをコップに入れる。そして、それをこぼしてから、石ケンできれいにコップを洗う。ていねいに

洗ったから、もう、ほんのわずかも、おしっこはコップについていない。それはまったくきれいなはずだ。しかし、それに水かジュースをついで、君に飲んでごらんといったら、どうするだろう。じつさいにはきれいなんだから、なんでもないさ、と飲めるだろうか。きつと、いやーな感じがするにちがいない。飲んだにしても、ひどくやせがまんして、むりして飲むにちがいないのだ。そのコップを、いくど洗ってみても、君はまだきれいになっていない気がするのではないだろうか。おそらく、百ぺん洗っても、君には、入っていたさいしよのおしっこが気になるにちがいない。

そうだとしたら、前に話した、あの神経質な、手を洗っても洗っても、まだよごれているような気がする人と、どこがちがうだろう。頭ではわかっているが、どうしても気がすまないというところは、そっくりではないだろうか。

君とその神経症の人のちがいは、君がおしっこをよごれていると思うだけなのに、その人は、つり革も学校の机も、おしっことおなじよりにきたないと考えるところだ。ところで、おしっこはそんなにきたないものなのだろうか。ばいきんのことを考えると、人間のおしっこほど、きれいなものはない。健康な人のおしっこは、君の手などよりも、それどころか、水道の飲み水などよりも、ずっと、ばいきんが少ない。もし、君が医学を学んで、人間の病気のことを知るようになれば、そのことがすぐにわかる。だから、君は、君がばからしいことを心配しているなど思った神経症の人たち、つり革にさわれないで、さわったら十ぺん以上も石ケンで手を洗う人たちよりも、ばからしいことを心配しているといえる。

では、ぼくたちが、不潔だ、よごれていると感じるのが、非衛生的で健康に害があるということとちがうのなら、それはどういう意味を持っているのか。その心配のうしろ側に、衛生ともばいきんとも関係のない、けがれという考えが、無意識なものとして、ひそんでいるのである。

けがれ、それは昔の、科学的なものの見方を知らなかった人間の考

えだ。おしつこは、きたないものではなく、けがれたものだった。ぼくたちの祖先は、あまり肉を食べなかつたらしい。けもの、四足の動物はけがれていると思つていたからだ。女も、けがれていると思われた場合があるらしい。いまでも、女がのぼるとけがれるからといって、のぼらせない山、女人禁制の山が残つている。

インドには、不可触賤民と呼ばれてさげすまれている人々がいる。インドには、長いあいだ、カストと呼ばれる階級制度があつた。そのいちばん下の階級のまずしい人たちが、不可触賤民と呼ばれていた。たしかに、その人たちは貧乏で、きたならしい身なりをしていただろう。病気も多かつたかもしれない。しかし、だから、さわると危険だと昔の人が考えていたのだらうと思うのは、ばいきんを持ちだして不潔を考えているのとおなじで、意味がない。昔の人たちは、その人たちを、よごれていると考えたのではない。けがれていると思つたのだ。けがれというのは、洗つて落ちるものではない。

けがれとは、どんなものなのだろう。それを知るためには、昔の人たちがどんな考え方をしていたかを知る必要がある。

現代に生きているぼくたちは、人間がどうして病気になるか、人間にどうして災害がふりかかるのかを、科学的につきとめようとする。まだ、ぼくたちは、その原因を完全につきとめることはできないし、知らないこともたくさんある。しかし、わからないことを、神様のたたりだとか、自分に悪魔がついているからだなどとは考えない。

しかし、昔の人は、おそらく、そんなふうにはしか考えられなかつたのだ。そのような習慣は、いまでも残つている。いなかに行くと、ある家につきつきと不幸なことが起こつたとき、よくたたりだなどといわれる。そして、そのたたりを消すためには、神様におはらいをしてもらつたり、お坊さんに供養してもらつたりしなければならない。

君たちなら、たたりだなんて迷信さ、と考えることができるだろうけれど、年寄りのなかには、どうしてもおはらいだとか、おきよめなどをしてもらわないと満足できないものもあるだろう。そのたたりというのは、ばいきんや毒によごされていることではなくて、神様に怒りをうけるような悪で、けがれているということだ。洗つて落ちるよ

うなよごれではなく、儀式できよめられる、けがれなのだ。ことばの使い方のちがいが、君にわかるだろうか。ぼくたちのおじいさん、おばあさんでも、こうしたたたりのことを信じているものがあつたくらいだから、何百年も何千年もの昔の人たちが、ほとんど全部、こんな考え方をしていたとしても不思議はないだろう。

君はときどき、自動車の中にお守りぶくろがぶらさがっているのを見たことがあるだろう。あのお守りぶくろのおかげで、自動車の事故がなくなるとは思うまい。事故を起こさないためには、注意深く、おたがいにルールをまもって運転することが、いちばんたいせつだ。しかし、あのお守りぶくろとおなじものを、ぼくたちの小さいときには、よく首からさげさせられたものだ。お守りの中にはいつているおみだの神様が、ぼくたちを守ってくれているのだと、年寄りから聞かされた。

昔の人たちは、自分たちには、自分たちを守っているとくべつな神様がいて考えていたのだ。お守りなどという習慣も、その考えの残りだといえる。ときには、あるとくべつな動物のすがたに、神様がすがたを変えていると考えた場合があるらしい。そして、その動物が、自分たち一族の守り神として尊ばれた。それがトーテムと呼ばれているものだ。アメリカ・インディアンのトーテムポールなどを、君たちは写真で見たことがあるだろう。あのトーテムは、それぞれの部族でちがつているけれど、その部族にとっては、そうしたたいせつなものだったのだ。日本には、アメリカ・インディアンのような形で、トーテムは残っていないけれども、それでもあるとくべつの動物が、神聖な動物として、殺すとばちがあたると考えられている。キツネだとか、タヌキだとか、シカだとか、いろいろとあるだろう。

そうした守り神のようなものとはべつに、タブーというものも考えられていた。それは、ある事柄だとか、物だとか、人間などで、神聖で、さわつてはならないものにきめられていたのだ。さわつたら罰があたえられると、人間がおそれていたのだ。このタブーには、神聖だから、さわつてはならないものと、その反対に、けがれているから、さわつてはならないときめられていたものがあつた。

こうしたトーテムとかタブーは、いまでも未開の原始人の生活に残っていて、それが研究され、ぼくたちの祖先たちの考えの中にも、似たような考え方があつたことがたしかめられた。

守り神が自分たちにいると考えるのなら、ほかの連中にも、彼らの守り神がいる。その敵の守り神が、自分たちにとっては、悪いことを起こすにちがいないと考えるのも当然だ。また、人間に不幸や災難が起きる。すると、いい神様に悪い神様、つまり悪魔だとか、悪霊だとかがいると、考えなければならなくなる。

タブーの場合にも、その考えは、いろんな形になっていた。ある人間が、神聖でさわつてはいけないのなら、人間に二種類を作ることになる。神聖な人間から見れば、ふつうの人間は、神聖さをけがす人間だ。こうなると、ふつうの人間よりもけがれた人間を作りだすようになる道すじもわかるだろう。王様とか、お坊さんのような人たちが神聖でさわつてはならないのなら、不可触賤民のような、けがれていてさわつてはならない人間が考えられるのも当然だった。

いま、君は、こうした人間の差別をケシカラヌものと考えてことができる。しかし、それがどうしてかわからないと、ぼくたちのいまの世界にもある、人間の差別をなくすことはできないだろう。（三九八八字、表現を変更した部分、及び省略した部分がある）

なだいなだ『心の底をのぞいたら』（ちくま文庫、一九九二〔一九七二〕年）による